

---

# 遠雷

testrip

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遠雷

### 【Nコード】

N2852F

### 【作者名】

testrip

### 【あらすじ】

遠くで鳴り響く遠雷。私は愛されている。夜中に鳴る電話、聴こえる音。マンションの一室で湿った世界がぐわんぐわんと広がる。一人の女性のお話。

愛されるが故の苦しみを、君は知っているか。

『遠雷』

遠雷が響く夜中にそれは鳴った。まるで私を監視していたかのよう  
にタイミングを見計らって。どきりとした、私は丁度その近くに  
いたのだ。

「もしもし」

前半部分が掠れたのは喉の渴き故か、それとも焦り故か。そんな  
事は分かりようも知りようも無かった。ただ電話口の向こうから聞  
こえる、スーツスーツという息の渴いた音が酷く不気味であっただ  
けだった。もう時計は重なり合う時間から二時間も越えていた。未  
だに電話口からは何も聞こえない。閃光が部屋に瞬く間に、私は電  
話に苛立ちをぶつけた。

「どなたですかっ」

より焦り、湿った声になったのは力を入れすぎたせいだろう。だ  
らりと汗が首筋を伝う。

「あいしてる」

はつきりと、電話口の向こうからそう聞こえた。寒気や嫌悪感が  
一気に体を駆け巡る。受話器が大きな音を立てて戻される。呼吸が  
荒くなる。そしてまたそれが鳴る。今度は恐怖しか感じなかった。  
一体何なの。

私は鳴り続けるそれを無視して寝室へ向かう。未だに耳にこびり  
付くスーツスーツという渴いた息。それとは反対に湿り続ける体。  
まるで耳元でそれを当てられているような、ぞくぞくする感覚。自  
然と足は速まっていた。

音を立ててベッドに倒れる。誰があんな電話を寄越したのだろう

か。夕チの悪い冗談にしてはやりすぎである。そしてそこで気付く、私はこんな時間に誰に電話を掛けようとしていたのだろうか。友人だったか、それとも田舎の両親だったか、それとも。

どうしても思いつけずに拳をぎゅっと握る。そして何かを忘れるように、目を閉じる。目蓋の裏は暗い。当たり前前の筈なのに、黒の世界が非常に恐ろしい。遠雷も電話のコール音も、もう止んでいた。くだらない。

うつ伏せになり、枕に顔を押し付ける。上から何かかざしりと音を立てて乗った。否、乗っていない。私が乗った。

誰があんな事を。

電話が頭に浮かぶ、鮮明に遠雷の音が聞こえる。コールの音は聞こえない。思いつけば、何か微妙に噛み合っていない。馬鹿らしくなると私はシートにくるまる。それでも思考は止まない。渴いた音が耳元で聞こえる、それはシートの擦れる音だった。

息を吐けば、枕によって湿って返ってくる温度。生々しさと憂いを帯びている。どこかで似た感覚を覚えた。どこかでかは覚えていない。

コールがまた遠くで鳴る、遠雷はどんどん遠ざかっていく。何故か心が締め付けられた。コールは鳴っている、私の耳に届いている。電話は寝室に子機がある。それは鳴っていない、親機だけが鳴っている。

ありえない。

リビングへと駆ける。違和感はこれだったのだろうか。私は鳴り続ける電話を再度持ち上げた。先同様にスーツスーツという渴いた音が聞こえる。よく聴けばそれは息の音ではない。どこかで聞いた物が擦れる音。誰かの絶叫が木魂する。恐怖が恐怖で覆われてそれが膨らんでいく。大きくなったそれをあやす事は私には出来ない。

戻る事も逃げる事も出来なくなった私は立ちつくす。寝室への道の電気はいつ消したのだろうか。真つ暗なそこは口を大きく開けて待っている。そこへ行く勇氣など、私にはもう無かった。遠雷が一

際大きく鳴った。一瞬意識が飛ぶ。

「あなたがすきよ」

聞き覚えのある声だ。そう思った。ぼんやりと意識が還る。

妙に冷静になっていく頭。それとは反対に汗を掻き続ける体。まるで自分のではないみたいと言ふ事を聞いてはくれない。私は頭を抱える事も自分を抱き締める事も出来ずにいた。

スーツスーツと音がする。向こう側で湿った行為も聴こえてくる。もう理解出来ていた。頭の中のフィルターのせいで、音が鮮明に聞き取れていなかった。がさがさと鈍い擦れる音が、本当は聴こえていた。

いつ、一体いつ。

それはいつぞやの諸事。寂しさ故に重ねた回数すら、忘れてしまったような。そんな諸事。私の頭には盗聴器の三文字が踊り続けている。どこへ逃げればいいのかがまったく分からない。

それなのに未だに違和感が頭にこびりついている。何が差異をもたらししているのか、私には見当もつかない。

受話器を強引に置く。静寂が部屋を包んでくれる筈だった。部屋の中には誰かがいるような温い空気が流れている。それは頬から手から、全身の皮膚から私の頭に警鐘を鳴らす。

逃げられない。そう直感する。

私は覚束無い足取りで、シンクへと向かう。コップへ水を注ぐ手が震えた。そこへ誰かがそつと手を添える。ある筈の無い手が、そこに見えた。絶叫が木魂する。誰かが来るかもしれないだなんて、今の私には考えが追いつかない事だった。

絶叫がわんわんと鳴る。またどこかが詰まる。コップは落ちてはいない、震えながらも持ったそれからは水がぼとぼと零れている。なのに床は濡れない。誰かが拭いたかのように、綺麗なままだ。

飲む気になれず、そのままシンクの内側へそれを置いた。頭が揺れる。ソファに倒れこむ。

助けて。とそれだけを渴望する頭が働く。どうしようも無い恐怖

と違和感。部屋にいる存在。全てが何かおかしかった。

立ち上がり、手が電話へと伸びる。コールは鳴らない。安心して受話器を上げる。親の声が聞きたい。純粹にそう思い、ボタンを押す。耳に受話器を当てると、遠雷が響いた。

コール音が聞こえない。私は急いで耳から受話器を離す。よく見ればどこからも光を発していない。ただの塊だった。

停電？

違うと一蹴する、リビングにはしっかりと電気が点いている。ならどうしてだ、と心で叫ぶ。

そして、また渴いた音が聴こえる。湿った声も聞こえる。コールは鳴らない。手を電話へ伸ばす。そこで気付いた。この状況に覚えがあった。電話の近くに佇む自分と、鳴り響く遠雷。聞こえる不気味な音。正確には聞こえている気がする音。

誰がいる、誰かがいる。私は受話器に触れる。遠雷が鳴る。あいしている私の口が動く。意識が底へと沈んでいく。諸事がまどろむ意識の中聴こえる。私の声だけが聴こえる。

私以外に、誰も部屋にはいない。

f i n .

(後書き)

某企画の開催期間はネット上にいない。参加したかったなあ作品。

誤字脱字、矛盾の為改訂……ちゃんと書いてから上げます。今度から(反省

一時間……短い時間という事は荒さが目立つだけですよね、すみません。

纏まりが悪い文章となりました。

あ、此処では初めてのR15です。

愛するのは良いのですが、程々に。世界が酷く狭く感じられるお話になりました。

タグを見ると、この訳の分からん話が少しだけ分かりますでは、失礼。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2852f/>

---

遠雷

2010年10月8日15時31分発行